「滑稽句」を楽しみませんか（二）

金澤 健

俳諧の精神

今回は、滑稽句のいささか理論的な裏付けを試みてみたいと思います。広く知られているように、俳句も川柳もそのルーツは俳諧にあり、「俳」も「諧」も共に滑稽を意味するということも比較的知られています。出自から言えば、「俳句も川柳も滑稽を持ち味とする句を作り、楽しむ」ことから始まったのではないでしょうか。

そこで起点に帰ってみようと、俳句界の方、川柳界の方、文芸評論家の方の書かれた俳諧に関する論評をじっくり読んでみました。さまざまなご意見を私なりに整理しますと、「俳諧の基本精神」は、次の三つに纏められるのではないか、と思い至りました。

俳諧の三大基本精神とは、

一．諧謔、機知に富み、滑稽味を湛えた句を詠む。

二．詠む対象は、自然、人間、社会、時代すべての森羅万象とし、それらの本質を発見し、穿つ。

三．滑稽を詠むことにより自分も楽しみ、そして、自分の句を読んでく

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

れる人々をも喜ばせる。即ち、滑稽という感動を共に分かち合う。

この三大精神は、「自分の身の回りにあるおかしみ、滑稽を素直な気持ちで、五七五のリズムで詠む。そして、出来上がった句を仲間に発表し、批評を受けつつ、共に滑稽という感動を共有する」ことによってこそ具体化できるのではないか、と考えるようになりました。前回、私が滑稽句作りと、その発表について述べた手順が、俳諧の精神に叶うのではないか、と思うに至った背景です。

即ち、滑稽句とは、俳句なのか川柳なのかに拘る前に、双方の出発点である「俳諧の精神を具体化する句」と捉えてはどうでしょうか。その意味では、滑稽という大本を押さえているのですから、俳句と受け取って貰っても、川柳と受け取って貰っても、読む方に決めて頂いていいのではないでしょうか。むしろ、滑稽味を失った俳句、川柳は、その出発点の基本精神から外れているという点に於いて、「新傾向短型詩」として捉えるべきなのかもしれません。

しかしながら、俳句も川柳も文芸の一ジャンルとして確立されており、私としては、これらのジャンルとの対立、混乱を起こそうという訳ではありません。滑稽句を原型とし、これをアレンジして、滑稽俳句の分野へ持って行ったり、滑稽川柳の分野へ持って行くことで、既存ジャンルとの融合は十分図れると考えます。そして、どうしてもアレンジ仕切れない滑稽句は無理にいじらず、そのまま滑稽句というジャンルで、その持ち味、良さをそのまま味わえばいい、というのが私の主張です。

私自身が、滑稽句のまま、その良さを味わう方がいいのではないかと考

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

える自作句を、次に例句として挙げさせて頂きます。そして、自分なりに、季語を詠み込んで、滑稽俳句へとアレンジした句を（ ）内に示させて頂きます。二つの句を詠み比べて頂いて、滑稽句のままの方がいいか、季語を入れて滑稽俳句にした方がいいか、ご意見を伺いたいところです。但し、無季俳句という分野がありますので、無理に季語を入れず、そのままにしておいて滑稽無季俳句（長ったらしい名称ですが）を標榜するのもいいのかもしれません。

偽物が出て本物が威張りだす

（偽物の出しが自慢の秋の壺）

存在の軽さや開かぬ自動ドア

（自動ドア開かぬわたしはみずすまし）

言わずとも解れと云われ謎のまま

（言わずとも解れと云われ朧かな）

道しるべ熊に注意と云はれても

（熊出没言い放ちたる道しるべ）

生き馬の目を抜きほっと一人酒

（生き馬の目を抜きほっと夜長酒）

（続く）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。